

「りすとどんぐり」のあそびから

ひとりひとりが、自らの足で 飛躍することを願って

関 美 恵 子

いよいよ三月、冷たさの中にも和らぎの感じられる三月、

それはやがて芽生え、花開くものの秘かに前進の力を貯める息づまるような慎重さをおもわせる

時、私たちと共に考え、くふうし、困り、喜び、あそんだ子ども堂々と巣立つ力を仕上げる時でもあります。

子どもの全身が躍動して本当に身体のすみすみまでも、その一つのこととに集中して動いているみ

と、じっくりみつめる瞳の輝き、考めぐらせる真剣な

姿、自ら考え、試し聞き、思う価値あるものに挑むこの没入した子どもの姿こそ、私たちが育てたい子ども像でもあります。もうすぐ学校という新しい集団にく子にも、お兄さんお姉さんへ進級する子にも持たせておきたいのは、物事に対して積極的に取り組む意欲と、どんなに苦しくともやれるんだ、という自信を育てておきたいということでした。

ただ楽しく遊ばせてもらつた、というだけでは楽しい想い出にならないでしょ。

もういやだ、止めたい、と思うぐらい苦しかった時、先生に励まされ、お友だちに「しつかりね、がんばってね」と支えられてやっとできたあの喜びというのが、子どもの心の中にじっくり根をはり、仕事の意欲となって育つていくので、この自らの努力で得た満足感をどの子にも果たしてもたせたでしょうか。

ここぞひとりひとりの子どもに教師として与える唯一の贈物と考えています。

——ひとりひとり——ということは教育の原則であり、最近では当然のことのように使われておりますが、しかしひとりひとりといふこの重さ、難かしさにいまさらながら考えさせられるものがあります。

遊びの中でひとりひとりを育てることと遊びを高めることは、当然一つのことはありますが、これを一つにするためにひとりの考え方を遊びや仲間に役立てる方向づけ、意味づけ、整理する仕

事がうまく行なわれないとひとりが生きてこないので、この仕事をより確かに行なうのに、

1 遊びの素材をよく研究すること

素材そのものに子どもの興味があること、素材 자체のおもしろさ、発展性のあるもの、素材に豊かな魅力があること、そうした素材のもつ本当の価値をしっかりと軽く子どもに、その素材に対しても教師が新鮮な驚き、感動をもっている。そういうことが大切だと思います。そしてこの驚きや感動の質を的確につかみとることをしていきたいと思うのです。そのためにも、教師自身がその素材に対して感動を追求する意欲をもつことで自らみつめ、驚き、思考する時はじめて子どもの驚きにもつながっていくものだと思います。

2 遊びの中の子どもの関心や興味の在り方を具体的に把握する

子どもの遊びの感動の質を正しく読みとり、この新鮮な思いを遊びの中心に据えて、その遊びをどう方向づけ、そこで何を考えさせていくか、それが子どもに本当に追求させるものになるかなどのことから目標が生まれてきます。

具体的で単純で方向のちゃんととした目標をもつても、それは固定したものではなく、刻々に生まれてくる問題によって修正し、高まっていくのですから、ひとりひとりの受け止めの実態を常に捉えていくことが大切だと考えてています。

「りすとどんぐりのあそび」

秋の終わり頃、幼稚園に隣接している公園のりすとがどんぐりを喜んで食べたことや、一つ一つのどんぐりをだいじに土に埋め、

こうして、ひとりの子どもがもつている可能性も、問題をもつたようになったとか、スキップができなかつたのに上手にできるようになったという育ちの上に、今日の遊びの中で、ひとりひとりがどんなに自分を精一杯活動させたか、友だちの動きの中からも自分が何をさらに考え深めたか、そうだったのか、あっそれならこうしようと、その瞬間を主体的に生きたかということを大事に考えてみたいとおもうのです。それは背のびをしなければどかない、樂々とできるものでなく、努力すれば、がんばればできるという質の高いもの、そういう困難にぶつかることで、そして遊びがこんなにおもしろく発展したこと以上にあの子はここでこんな苦労をしたとか、この子はこんなすばらしい思いつきがあつたとか、このチャンスがこの子をめざさせたのだという遊びの中で、子どもと先生、子どもとの対決を価値あるものにしていくことに仕上げの仕事の意味があります。以上のような育ての願いと子どもの実態に足場をおいて探りつつ、創りつつ、展開した遊びの記録を書いてみましょう。

手で押えていることや、藁くずを巣箱へ運ぶのをみて、りすくの関心を深めた。そして秋の山へ遠足にいった時、紅葉の深い林の中で、次第に熟す木の実や冬仕度する木や草に目を止め、ここに住むりすの生活へ思いを広げ、生きものがお互いに助け合いながら、生命を守る温かいけなげな営みに心を止めたことがあります。寒い冬が過ぎて、日だまりの暖かさに動きはじめたりすのようすが子ども毎日の楽しい報告になり、子どもの心中には、ずっととりすが住んでいたのでしょうか。

そこで次の物語（概略）を聞かせました。

「秋も深まりたくさんどんぐりが風とともに落ち始めました。丸いもの、長いもの、大きいもの、小さいもの、みんな落ちは、たべられたり、誰かにみつけられてしましました。ところが誰にもみつかずうまく山に残ったどんぐりが唯一ありました。それがどうとうりすにみつかり、食べられようとした時、「秋まで待ってくれたら五〇でも一〇〇でもあげるから」と懸命に頼んでやっと助けてもらいました。秋がくるたびに、「来年こそきっと」と約束を重ね、どうとう何年か後に大きな木となりたくさんどんぐりが実った」というのでした。

この話の心は、何とか実のなる木になりたいと一生懸命がんばるどんぐりのけなげさと、今すぐでも欲しいけれど、どんぐりの願いを聞いてやるりすの温かい交情、そしてお日さまや雨の力を求めて少しずつ大きくなり、やっとたくさんの実をみのらせた

どんぐりの喜びと、辛抱して待って大好きなどんぐりが一杯になります。喜びの気持をわからせたいのです。

○話すことがあまり得意でない子どもたちに――

もうすぐ卒園というこの子たちに一番気がかりなのは、溢れる思いをもつて遊ぶのに、話すことがあまり好きでないことでした。話せるということは、単におしゃべりができるということではなく、自分の思っていることを的確に自分なりのことばを使って精一杯表現することだと思うのです。子どもはともすればおしゃべりを通して経験をさせようとしますので、できるだけ身体を通してわかる方針をとり、その身振りを読んでやることが多かったです。たまたま作り始めたどんぐりの木や、作ったりすをもつてそれを動かしながら話しているのをみつけました。

○作品を使ってあそぶホームページへ発展――

子どもたちの遊びを見ておりますと、それはりすを手にもつて自分がりすになつて動いています。つまり自分と作品が一体になつて動き語っているのでした。

ペーブサートという概念からは、少しおかしな形になりますが、この子たちは、自分になつて動くことから本当の話し言葉や話し方が生まれそうに思いました。作品だけを動かして語るには、今の場合あまりに飛躍があるように思つたのです。そしてこの遊びをさせながら、このお話を心をどうつかませ、

心を育てていくかということでした。

○遊びの中から

1 どんぐりにいのちがあることを感じさせようとして

子どもがどんぐりになつて遊んでいるようすをみて、いますと、いとも簡単に芽を出し、ぐんぐん大きくなっています。こんなに簡単に芽を出したり、大きくなることに慣れさせて感動をなくしてしまつてはこの話の心を失います。あのころころと転がるどんぐりのつややかな堅い皮の中に生きる芽があることをじっくりつかませておきたいと思って、どんぐりを二個ずつ園庭の柔らかい土を探して埋めさせてみました。ただ埋めさえすればいつか芽を出すのだということなく、どんぐりが何とかして芽や根を出すにも、長い時を経なければならぬ生きる嘗みを感じ欲しいのでした。

数日後、先生ちょっとふくらんでたよ、わたしの黒くなつていたわ」と報告がありました。埋めたあのどんぐりをそつと掘つてみたのでしょう。

こうして芽や根の生まれるのを待つ気持が、この話のたつた一つのどんぐりの心に通つていけばと願いました。

2 あそびに役立つ思いのこもつたものを作らせようとして

山の木が春から夏へ、夏から秋へと移りかわることをそれぞれ四季の木を作つてそれを置きかえて遊ぼうとしました。

そのうち、山の木は同じ一本の木が四季によつて変化するこ

とに気付き、一本の木に四季の変化をつけようとふうが始まりました。そして次のようなものを作りました。

角材の一面に緑の木を、もう一面には、それが紅葉した時の木をつけ「秋になりました」というとバタンと回転させると秋の木になるという仕掛けでした。まだ、一本の木の片面は夏の木に、片面は秋の木にというように葉っぱに夏の葉と紅葉したものと貼り合わせたものができました。（左上図参照）

こうした遊びに使う道具は、単に山の木ではなくて、その物語の意味を十分内包した木作りで、より一層、子どもにその木の果たす役割を確かめさせ、話の中に深く心を止めることになりました。また、ひたすら大きくなりたいと思っているどんぐりを作つた時のこと。



今はこんな小さなどんぐりでも根が出て芽が伸びぐんぐん大きな木になり、たくさん熟した立派な木になることを思いながら根っこや芽、赤ちゃんどんぐりまで中に入れたのありました。ところがひとりの女兒が今は小さいけれど、こんな立派な木になりたいという大きな木を作り、それを折りたたんでどんぐりの中に入れ「早く大きくなりたいな」といながら伸ばしていくのです。この折りた

たみ式どんぐりの夢の表現は大へん楽しいものがありました。

つまり本当に物語に役立つ道具は、それをもって動かせて、その意味が十分表現できるかどうかを確かめつつ、手を加えていくところに道具作りの楽しさがあるのでしょう。

3 生きたことばであるために

たった一つ残ったどんぐりがおなかのすいたりすに見つかってしまって食べられようとした時、「もう一年待つ」と頼むところがあります。

「もう一年待つ」ということばは、むずかしいものではありませんから誰でもいえますが、心から懇願しているどんぐりの気持で話すということは、むずかしいことでした。頭のよい話すことの得意な〇君がした時、「もう一年待つ下さい」とそれは、はつきりといえましたけれど、何か語り方のじょうずさが前に出てしまってきました。

ところが、のつそりと口の重いそれでいて心の中に一杯夢の

風船をもつたK君は、身体で目で困っています。そして窮したごとく「まつてな」と頼んだ時、作品のどんぐりもK君自らも一つになつて語つているのでした。

ともすれば、おしゃべりつ子が得意になつて前に立ち、思いつかっても口の重い子は、見る側になることを恐れます。

ことばをだいじに使う子にするために、ことばの心を気づかせておきたいと、K君のこのやり方をみんなの子どもにも考え

させてみました。「先生、K君のは本当に困っているみたいだ」と、たった一つのことばでもそれを通して十分感じを受け止めると、耳をもつようになりました。

4 そのものの思いをつかませることは、その子を育てることであり、ひとりの子どもを生かすことは仲間を育てることになる

A、どんぐりがたくさん落ちる音を受け持った音係のM君

M君は話すこと、動かすことはあまりじょうずではあります。が、遊びが進むにつれて「お山に風が吹くとたくさんのどんぐりが落ちました」というくだけでは、本当にどんぐりの落ちる音がしたらしいということになり、いろいろくふうしたやり方が披露されました。そのまま大きすぎたり、強すぎたりした中でM君の、どんぐりの一杯はいった紙箱をざらざらとゆり動かすのです。そのゆらし方加減がとても風の強さと合つてばらつばらばら、ざらっざらつと落ちていくどんぐりの感じを出しており、それを何より認め、喜んだのは子どもたちでした。

一つの遊びの中にはその持ち場にそれぞれ要を得た子がある筈です。子どものよさ、持ち味というものは多面的に採れば必ずその遊びの中で生かせる場がみつかるもので、M君は、いよいよはじまりという時にはいつもピアノの横で緊張して待つていました。どんぐりの子もM君の音に合わせて落ちていくこの子も同士に通う一つのものを見つめて、息を合わせて自分を打ち込んで没入することこそ、子どもに本当の楽しさ

を知らせるものではないでしようか。

B、語りをしたS君と友だちの励まし

「山に落ちたたくさんどんぐりが、いろいろの生きものに見つかり、次々に食べられてしましましたが、唯一つだけ生き残ったどんぐりがありました」このことを語る役をたくさんの子がやりたいといいました。S君もそのひとりでした。話すことはあまり得意でなく、いつも消極的になりがちの一一番身体も小さく弱いS君でしたが、どんぐりのこのおもしろさにとても興味をもっているようすなので、「S君にしてもらおう」といいました。みんなは多分に頼りないようすをしました。子どもたちにS君は無理だという印象を与えてきた今までの生活をとても申しわけなく反省しました。

「お山には、もうどんぐりはなくなつたでしょか……いいんまは……一つくれていました」とS君の語るのを、「いい方がちがうだけだ」

「僕が思っているのと一緒のことや」

「どんぐりが、うまいこと助かってるのはわかる」

「山鳩がとんでかえったら、すぐいつた方がいい」

「けれど、というところがいい」と共鳴したり、注文したりした。日に日にS君の語りが長くなり、内容も複雑なものとなつて、

「S君がいう時は、いい感じやつた」

「胸がすっとした」

「うまくいってくれ……とおもう」というありますまで、どうとうこの語りは、S君でないと感じが出ない」

「S君お休みせんとおいでよ」といわれるほどになりました。当日、

「お山には、もうどんぐりはなくなつたでしょか……いいえ、たつた一つだけ、こんなところにかくれて、大きくなろうとがんばっていました」と語ったS君の間のとり方、強いひびき、心をこめたいいえのニュアンスにその歴史と彼の思いが感じられるのでした。

出番を待ち、役目を果たすS君の姿は、とてもしゃんとしてきました。仲間も彼の力をしっかりと認め、自分でもはつきりと、僕はやれるんだという実感をもつたようでした。

仲間の励ましやささえがこの子に意欲を持たせ、自信となって、自ら励み努力したのではないでしょうか。

先生が語りを考えてやり訂正してやり貰めてやつて何とかこの役がやれたということからは、とても得られない実感でした。そしてS君がこうして一つ一つ乗りこえて自信をもつていく過程は、それを見守り、励ます仲間にとっても一つの誇りでもあり大きな感激でした。

こうして一つの遊びを創り上げる苦労や楽しみは、子どもに小

さな問題にも目をとめ、それをだいじに考え進めることや自分の
今に安住しないで少しでももつとよいものにという構えができる

くることが何よりの収穫でした。「どんぐりとりす」のペーブサ
ートは卒業式も近い日にやつとまとまり、他の組のおおぜいのお
友だちを招いて上演しました。

ペーブサート遊び「どんぐりとりす」

T 「夜になるとたくさんのはりすたちは、木の穴のお家へ入ってや
すみました」

りすたちは木の後で眠っている。

T 「今夜は風が吹いています。お父さんりすはうれしくなりまし
た」

父さんりす「お母さん、あしたはきつとどんぐりがたくさん落ち
ているよ」

母さんりす「みんなでどんぐり拾いに行きましょう」

子どもたち全員でピューッピューッと風の音、
それに合わせてM君、S君、箱の中のどんぐりをゆらせて落ち
る音をさせる。

T 「朝になりました」

一匹のりすが出てきてどんぐりをみつける。

りす「オーケーどんぐりがたくさん落ちているよ！」

次々とりすが家から出てくる。枝から枝へとび移ったり、木か

らすべりおりてきてどんぐりを捨う。

T 「幼稚園の子どもたちもきました」

さうと集にかくれるりす、先生に連れられ並んでやつてくる子
どもたち。

子どもの先生「今からどんぐりを捨います。先生のみえるところ
で捨いましょう」

生徒の子ども「あった」「ああ、みつけた」「小さいどんぐりあ
った」など口々にいいつつ捨う。

子どもの先生「お集まり」「さあ並びましょう」

並んでかえっていく。

T 「向うの山から山鳩もやってきました。山鳩もどんぐりが大好
きです」

ボッボー、ボッボーといいつつ飛び交い、どんぐりを捨つて、

T 「たくさんあつたどんぐりも次々と拾われていきました」

語り、S君、

「お山にはもうどんぐりはなくなつたでしようか。いいえ、た
つた一つだけ、こんなところにかくれて大きくなろうとがんば
つっていました」

Oさんのどんぐりがころがって木の蔭にかくれる。

T 「そこへまだどんぐりを食べていいなりすがやつきました」
空腹のりす「おなかがすいた、おなかがすいた」とどんぐりを探
す。「ああ、みつけた」逃げるどんぐり、追いかけるりす。

つかまりそうになつた時、

Oさん「まつて、お花が咲いて、また実がなる時まで待つてくれたら五〇でも一〇〇でもあげるから……」

空腹のりす「本当か？きつとだよ」と立ち去る。

Oさん、例の折りたたみ式夢の表現をしたものを持ち出したり、また元通りにちぢめて、「大きくなりたいな、早くこんなに大きくなりたいな」という。

T「やがてどんぐりがいったようにお山に花が咲きました」
春の花の作品にかかる。

T「そして花も散り秋になりました。約束のどんぐりの実は、どうなつたでしよう」

再び秋の作品にかかる。

りすたちどんぐりの木を探す。K君が小さい木をもつてきてOさんと交替する。（少し成長した例のどんぐり）

りす「あみつけた、どんぐりなんかできないじゃないか」
りす「うそだつた、抜いてしまおう」

K「待つて、もう一ぺん待つて、今度こそきつとたくさんどんぐりをあげるから待つて」と一生懸命たのむ。

りす「きつとだよ」

K「そうだ、お日さまに頼もう」

K「お日さま、たくさん光を僕に下さい」

お日さまを持った子少しづつ山の上へ出て、「早く大きくなる

んだよ」と山の向うへ沈んでいく。

T「お日さまの光をたくさんもらって、どんぐりの木はぐんと大きくなりました」

T「次の日もまたお日さまから温かい光をたくさんいただきました」

K君パッと広い場へ出て大きい木になる（身体で表現）。
お日さまになってキラキラ光つた子が次々に降りてきて、K君の木の枝となり根っこになつてていく。大きな群像の木となる。

T「毎日照らされてぐたりしてきました」

力がぬけて口々に「お水がほしい」「お水がほしい」

T「あつ雨が降つてきました」

雨粒を表現した製作物を持つた三人が、山の中を走りまわる。根っここの子、枝の子が雨の方へ向かって、チューチュッと吸い込む。他の子らも、土の中へしみ込む雨になつて群像の木のまわりに集まり一層大きい木となる。

T「何日もたつたある日の秋の日でした」

木の係の子がさつとたくさん実のついた作品を立てる。

「ああ、あんな大きなどんぐりの木」

「どんぐりがなつていてる」

「ひつてみよう」

たくさん実のなつている木のまわりをスキップでまわる。

(芦屋市立小槌幼稚園)